

細隙灯顕微鏡アトラス

澤 充, 岸 章治, 鈴木康之, 庄司 純 (編)

細隙灯顕微鏡は、私たち眼科医にとって最も基本的
に用いる検査機器です。19 世紀には原型が作られてい
ます。角膜や前眼部に細隙を通して照射し、反射して
きた可視光線を観察するものですが、手に入った画像
を頭のなかで 3 次元的に再構築することで前眼部の
画像診断を行うことができます。近年、さまざまな医
学・医療の世界で話題になっている画像診断学では、
不可視のエネルギー (X 線, 超音波, NMR など) を
生体に加えてその変化を観察するもので可視化が必須
となり、受容器から手に入った情報は高速のコン
ピュータで処理して初めて私たち医師が観察できる画
像が得られます。すべての医学・医療の分野を見渡し
ても、細隙灯顕微鏡は最も古くから実用化され、今日
に至るまで用いられている画像診断機器であるといえ
ましょう。

細隙灯顕微鏡はスイッチを入れれば何らかの像が見
えるものですから、一見特別の訓練を必要としない
と思われがちです。しかし、細隙灯顕微鏡の光学系と光
源の原理や発展の歴史をよく理解し、倍率のみならず
フィルターの使い方、反帰光線の活用や補助レンズの
利用などいろいろな技法を駆使することで、角膜や前
眼部だけではなく隅角、硝子体や網膜の状態も 3 次元
的に詳細に観察できます。

澤 充教授は、『角膜・結膜疾患』(金原出版, 1996
年)をお 1 人で執筆され、上梓されました。角結膜疾
患に対する一貫した考え方のもと、時代の流行とは関
係なく記述されており、わが国での角結膜疾患の標準
的な教科書であると思っていました。今回、中山書店
から前書の文章を中心とした教科書に対する補完的な

『細隙灯顕微鏡アトラス』を上梓されました。澤教授
の診断や治療の考え方を基本とし、庄司純先生 (日本
大学) が協力され、前眼部以外での細隙灯顕微鏡のさ
らに有効な使い方を示すために、岸章治教授 (群馬大
学) と鈴木康之教授 (帝京大学) のお 2 人がそれぞれ
網膜・硝子体の部分と隅角の部分を担当されています。

序に述べられているように、既出でない写真を基本
とした豊富な症例をアトラス (図譜) としてまとめら
れ、それぞれの症例に関する要を得た解説をつけてく
ださっているおかげで、教科書としても活用される素
晴らしい内容の書となっています。本書で特筆すべき
ことは、約 1/3 にわたり、細隙灯顕微鏡の開発の歴史、
構造とその使い方、さらに写真撮影のやり方とコツな
どが丁寧、なおかつ実践的に記述されている点です。
何となく使いこなしているつもりの細隙灯顕微鏡で
すが、本書を読ませていただいて改めて細隙灯顕微鏡の
有用性を再認識しました。著者の先生方の長年のご経
験を惜しげもなく教えてくださっています。

角膜や前眼部を専門とする眼科医のみならず、緑内
障や網膜・硝子体疾患をこれから学ぶ先生方にはぜひ
座右の書としていただきたいと思います。

山口大学大学院医学系研究科眼科学分野
西田輝夫

●B5 変型 頁 224 2008 年

定価 12,600 円 (本体 12,000 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-521-73015-8] 中山書店刊